

太節之部

一五

卷之六

〔解題〕現行の六行稽古本はかういふ外題のつけ方になつてゐるが、本來「又助住家の段」は「加々見山舊錦繪」の原本にはない。これは「加々見山廬寫本」^{さかみのきぶ}の第七段目の切であつたのを、後に兩作を撮合して上演するやうになつた結果である。

「加々見山廬寫本」は、寛政八年正月廿九日から道頓堀東の竹本愛藏座で興行された操芝居で、作者は中村魚眼、正本もこの時の刊行である。

有名な加賀騒動を材題としたものである。今日流布する「金澤實記」などいふ實錄物によつて傳へられる加賀騒動の大筋は次のやうである。金澤の藩主前田吉徳の臣大槻内蔵之丞君寵をたのみて主君暗殺を企て、延享四年五月吉徳江戸より歸國の途上嵯峨川を渡る際、野路井又助をしてその馬を水中より刺さしめて吉徳を溺れしめ。これが原因にて間もなく逝去する。ついで家督を相続した長男宗辰を毒殺し(寛延二年)、更に三男重照が家を繼いだのを老女浅岡と謀つて弑しようとしたが、遂に忠臣前田對馬守等の勧によつて寶曆七年陰謀露顯して一味の者悉く處刑せられたといふ。

ところで此騒動を始めて劇化したのは歌舞伎の方である。即ち安永九年に京都四條の中村猪八座で「加々見山廬寫本」を興行して居るが、作者は奈川七五三助・奈川龜助である。これを同年十二月十一日から大阪中座でも興行した。中村魚眼はこの作を採つて、後に淨瑠璃に仕立直したものと見てよいと思ふ。

本曲は操りの方では文政七年八月同じ外題で繰返されて居るが、天保五年二月廿八日からの御靈の芝居では「加々見山舊錦繪」の外題で、兩作をつき合せた趣向で上演されて居る。即ちその時の番附を見れば、梅澤村の段、中屋敷の段、水門の段、お初身賣の段、上屋敷の段、筑摩川の段、清光院の段、梅御殿の段、百姓一揆の段、又助住家の段、鶴が岡の段、長局の段、十内住家の段、鏡山揚屋の段、牡丹山敵討の段とかう分れてゐる。これが例となつて後には、「故郷錦繪」の外題で、筑摩川、又助住家、草履打、廊下、尾上部屋奥庭等を中心

心として演ぜられるやうになつた。「加々見山故郷錦繪」については次の「草履打の段」に述べる。

地跡にはつきほなま中に。夫も何と言ば。サ、早う駕へ乗らんせと。^{地聞く}又助も。せきくる涙呑込んで。^{詞才}ひ寄らん。詞なければ女房も。わざとよりはつと女氣の。思ひ切つても今更過分な女房。何にも言はぬ忝いと。^地すげなう見せかけて。^{詞去られた内に}に。ステ胸を塞がる憂き涙。扱はさう泣かぬ顔する男氣は。^{フシ泣く}よりは長居も未練な。もうお暇申します。アかと又助が。知る程せまる胸撫でおろ。猶哀れなり。^{地親}の心は知らぬ子が。アコレそれは又どうした事。子迄あるし。^{詞ム}、そんなら無理取つたのは。^{詞イヤ／＼大事の／＼母様を}餘所へ中。^{のゆき}退去りするが見目でもあるまい。お主の爲おれが難儀を救はん爲。アノやる事おりやいやぢや。無理もいふまこの求馬が挨拶を。イエ／＼構うて下勤め奉公する氣であつたか。コレ又助い悪さもすまい。コレどつこへも往てりますな。退けば長者が二人のたと殿。あつたかとはエ、聞えぬわいな。^{地不甲斐ない私ぢやとて。なぜ談合し}下さんなやと。^地絶り數ければ母親は。^詞へ。御妹があらばと地言捨てひつしオ、よう言うてたもつた。よう言うてたもつた。たもつたなう。コレ又吉。この母はの。内儀は表口。出かゝる向うへ又吉て下さんせぬ。お主や夫の爲ならば。^地が。悪さ遊びの走りごく。爰ちや／＼勤めはあるか命でも。何の惜みはせ行きとむなうても行かねばならぬ。晚と先に立ち。跡から付いて亡八の親方。ぬわいな。^詞村方から預つた金。定めから父様と寝やらうとも。^地夜の物踏フシ鶴を釣らせて内に入り。^詞イヤコてお前の身の難儀と。思ひ切つた君傾み脱いで風邪引かぬ様にしたもの。コレ内儀。いつ迄べら／＼待たすのち城。^地私や何にも悲しうない。嬉しうてレコチの人。虫押への桑山を。折々飲やぞいの。身の代の金渡したれば。もく地嬉し涙が／＼と跡は得言はずむまして下さんせえ。^{詞オ}、坊主が事はうこつちの奉公人。暇乞ひが済んだらせ返る。心を察し谷澤が切なさつらさ苦にせずと。随分そなも息災でと。

地 我真目にはほろりと一串^{ひとくし}思ひやる程 とおとなふ聲。ハイ又助内にをりま か。アイヤ何事も存ぜぬ我々。ハテナ
我故と求馬がつらさ身にかかる。涙數^{なみだすう}す。どなたちやおは入りなされませ。ア。ガマア何は兎もあれ。谷澤求馬へ
添ふ夕暮はフシいと哀れや添へねら 添ふ夕暮はフシいと哀れや添へねら 添ふ夕暮はフシいと哀れや添へねら
ん。地 親方は伸びあくび。調ハテ掇て てゝ打通る。地 それと見るより求馬は 出す一腰。地 求馬ははつとにじり寄り。
死別れもする様に。いつ迄言うても同 驚き。調 ヤアあなたは安田の庄司様と。押戴いてつくづく眺め。詞ム、縁頭に
じ事ぢや。サア／＼きり／＼乗つて貰 地 いふに恵り又助も。詞ム、スリヤあ 至るまで八つの梅の紋所。コリヤコレ
ひませうと。地 セつき立てられ詮方も なたが御家老様でござりますか。ヤ是 大殿より拜領せし某が差添。オ、それ
涙隠して。調 左様ならば若旦那様。隨 はしだり 地 マ存ぜぬ事とて無禮の段。よ。イヤコレ又助。いつぞやそなたに
分お健で。こちの人さらばと 地 ばかり 真平御免下さるべしと。求馬も共に身 渡した一腰。何と覚えがあらうがのと。
目に涙飽かぬ別れの暇乞ひ。哀れを餘 をへり下り禮儀 フシ正しく敬へば。地 地詞の内に又助は。一腰取つてとづく
所にくつわ屋^やが。無理に押込む範の鳥。又助猶も手をつかへ。調 ハア拙者めは と改め。調 成程々々。ござりますとも
タキ時離るゝ憂別れ。ナウ母様と慕ふ 求馬が家來鳥井又助と申す者。ガ誰あ く。イヤモすんど覚えがぞざります
子を。留めるも涙。行く涙いと身に らう安田の御家門庄司様。見苦しき荒 わい。今迄は申さんんだが。此の刀に
泌む。母親は フシ是非も泣く／＼振ら 家へ。御入來なしくださるゝ段。いか 就いて拙者が働き。イヤ申し若旦那。
れ行く。地 影見送つて主従が。心は暗 ばかりか大慶至極に存じ奉ります。シ お悦びなされませ。早や御歸参の時節
きエッタ 角行燈。燈す火影も長の夜も。テ 御國にはお變りなく。大殿様にも益 到來。ハア、地 慈や嬉やと。フシ天
本フシ六つと初夜とを隔てる。地 表の 益御機嫌よく。御座なされますかな。地を拜する心の悦び。地 求馬は一回合
方に立派の武士。人目を包む深編等。ム、面色に實義を顯はし。主君の御安 點行かず。調ア、コレ／＼又助。そな
詞又助は在宿召さるか。地 御意得なし 否を尋ねるは。本國の様子有じてをる たばかり悦んで。此の刀の譯はどうぢ

りぞいの。ハテモどうの斯うのはござに御入りと。地取出す紺紗押開けば。殿を失ひ奉る。斯くと世上へ沙汰あつた忠義。即ち所は筑摩川で。ホ、いか顔色にて。調加能院殿東山大居士。ムリと計らひて。密に説義致す所。此の程にも。身どもが手に入るサその劍。アムその位牌を我が君とはな。ホ、不審筑摩の川下より。我が手に入つたるサレ／＼お聞きなされませ。ヘ、此の刀尤も。五ヶ年以前大殿には。人手にか其の劍。改め見れば求馬が差添。シヤが手に入るからは。拙者の手柄の顯れかつて敢ない御最期。ナ、何と。すり様子あらんと來りしは。事の實否を探時。是といふも天道様のお蔭。エ、忝やあの殿様には御逝去とな。又助。求らん爲。モお恐れ多くも我が君を討ちうござります／＼。ヘ、＼＼＼＼マア馬様。ホイ。埠はつとばかりに主従は。奉るは又助なれども。言譯立たざる證何よりは若旦那。大切なは菅家の一軸。物をも言はず只うろ／＼フシ途方にく據の一腰。罪は遁れぬ求馬も同罪ヘエ片時も早うあなたへと。埠詞に求馬はれて居たりける。地求馬は猶も摺寄つエ埠是非もなき次第やと。智仁氣備の懷中より。恭しく一軸取出し。庄司が前て。調シテ＼＼敵は何者なるぞ。ホ、兩眼に。悔みの涙はら／＼スエトに差置き。調不思議に手に入る紛失のその敏は外でもなく。此家の主烏井又一軸。イザ御改めの上歸参の儀を御執助。腕を廻せと詰めかくれば。マ、＼＼＼＼成し。地偏に願ひ奉ると。主従共に兩先づ＼＼お待ち下され。コハ心得ぬはたまらず駆寄つて。鬪擣んで引付け手を突き。エヌエ疊に頭を摺付ける。威御仰せ。シテ大殿を寄せしは。この又捺付け。調アノ爰な人でなしめが。大儀を正して庄司友治。一軸開きとつく助と申す證據ばしござるかな。ホ、證據といふは其の一腰。ソモ一角が逆意だ。忠義頗する極重惡人。エ、何としの一軸。隨に落手仕つた。しかし左程の砌。御主君には別殿より。御歸館ある夜の道。筑摩川の水中に曲者あつて。途。目鼻も分かず續け打ち。打たれて

斯うと一言の。身の言譯もあら涙。傍に付込む忠義の一心。いかゞはしけん又おろ／＼又吉が。調コレ父様。何で其助がひるむを得たりと右手の脇腹。骨ら。地車軸を流す雨雷。目指すも知らの様に叩かれさつしやる。おりや悲しも碎けと突込む竹鎧。うんとばかりにぬ眞の聞。フシ間近く聞ゆる轟の音。い。口惜しい。コレ小父様。もう堪忍どつかと坐す。直ぐに止めと立寄る求。調是こそ慥に蟹江一角。主人の爵位をして下されと。地頑是泣く聲又助は。馬。ヤレ待て暫しと押しと止め。調惡家の仇。地今ぞ散する此の時節天の與思はず溜息ほつとつき。調ハア天なる事にあらで悪事と見せしは。まつ其のへと小躍りし川へさんぶと飛込んでかな命なるかな。此の上は何をか包ま如く討たれん覺悟。ヤモ下郎に似合はオタリ忍ぶ。水底早潮の大川浪を。蹴立ん。筑摩川にて大殿を。コレ此の刀にぬ健氣の最期。又主君の怨敵又助を。突て渡りくる。馬の諸足二指三指。さて討つたるは。こなたに罪を負はせんきとめたる谷澤求馬。ホ、天晴れ忠臣たくみ。斯く顯はれし上からは毒喰見届けしと。地手負に聞かす情の詞。聞逆様落つる水底。あいろは見えず。調勿はゞ皿。この又助が死物狂ひ。まさかくより苦しき日を見開き。調ハア、身體なや大殿様とは露知らず。何なく首の時の足手まとひ。エ、邪魔な伴と以ハ有難き御賢察。大殿様を手にかけし。を斬切りしが。地神ならぬ身の是非も前の方。地抜く手も見せず又吉が。申譯とは恐れながら。マヽヽ先づなや。なぜ其の時にこの腕が折れ碎け。フシ細首はつしと打落せば。調扱てこゝゝ一通りサ聞いてたべ。さいつはせざりしづ。百萬石の大守たる。君そゝ。肉身の子を殺し。主に刃向ぶ頃お館にて。主君を讒する蟹江一角。を寄せし此の又助。日本國の神々の御大悪人地逃しはやらじと有合ふ竹鎧。討つて捨てんと駆行く折しも。望月源罰を一度に受くるとも。よも此の上の取るより早く突つかくる。ジャ猪小藏我をとゞめ。今討取らば變の元。歸るべきかと腕に喰付き噛付いてスエナ才など打拂ふ。こなたは剛氣の銳き白りを待受けまつ斯うと。教への詞に從悔み涙にくれ居たる。調ム、拔は依人刃。猶も透さぬ求馬が手練。付け入りひし。我が身の運命筑摩川。先へ廻つ一角と。思ひ違ひであつたるか。地さ

は知らずして手にかけしと。返らぬ歎取るより早く咽にがはと突立つる。驚に暮す悲しさは。一重の物も粗末がち。きに手負ひは這寄り。詞コレ／＼若旦く求馬又助も。扱は様子を聞いたる故。頑是なき子心にも。コレ父様餘所の子那。思ひ違ひであつたかとは。チエ、共に死ぬるか可愛やな。詞オ、お前もの着る物は。なぜあの様に美しい。わし

マお情ない御一言。間違ひでなくて殿覺悟の其の深手。可愛い我が子や夫を。うぞ着せて下様が。何と。何と討たれませう。コレ先立て。何と永らへ居られうぞ。地此されと。せがまれた其の時は。コヽ、此斬られうかいの。今の今迄手柄した。の世の見納め又吉が。顔を一日と這寄の胸が張裂く様にあつたはやい。地親忠義は立つたと心の自慢。今日は吉左つて。空しき首を抱き上げ。詞コレ／＼は此の儘果てるともせめて恃は人らし右申してくるか。明日はお國の便りが又吉。ま一度母というてたもく。ま一う。鎧一本もつかさうと。思うた事もと。

地夢にも知らぬ身の科の仕置は度母というてたもいなう。地ほんに思喰ひ違ひ。現在親の手にかけて。殺すは眼前コレ此の竹鎧。竹鋸の罪人と死へば味氣ない。斯うなる事とは講知ら何の因果ぞと。歎けば女房もむせ返り。尻尾に恥をさらし。諸人に斯くと見せす。朝な夕なにいつくしみ。手しほにかさつきの別れの其の時に母様ならと取てたべ。さは言ひながら女房が後で此けしいとし子を。連添ふ夫が此の様に付いて。跡追うたのが名残とも。知らの事聞き居つたら。喰ぞ吠えをらう不殺すといふはエヽマ何事ぞ。慘いわいすも一度逢ひたさに。人目を忍び漸う便やと。我が苦痛より堪兼ねる。夫のなど取付いて口説き立つれば又助も。と。殺被來た甲斐もならう死別れ。一世歎きを門の口始終立聞く女房が。わつ詞オ、道理ぢや道理ぢや道理ぢやわやの縁と聞くからは。長い未來で逢ふ事とばかりに聲を上げ涙と共に駆入つ。主殺しの大罪人。親子は一體慄にもならぬ事かと搔口説く。夫婦手に手て。詞ナウ又助殿。始終の様子は聞きも。苦しい最期がさせともなさ。憎うを取交し。叫び歎けばほどばしる。血ました。さぞ口惜しかろ悲しかろ。地て何の殺さうぞやい。憎うて何の殺さ沙は秋の龍田山落ち流れて。谷川もわしも一諸に死にますと。落ちたる刀うぞやい。長の流浪の其の内にも貧苦

フシ紅染める如くなり。地庄司も悲歎

にくれながら。斯くては果てじと聲は折から息せき庄屋の治郎作。足もいそげまし。ヨヤア懺悔に滅する汝が重罪。／＼駆來りコレ／＼又助殿。殿御歸館の道を變へさせ。人手を借つて主君を害す。誠の敵は望月左衛門。惡事の元締望月が。絞り取つたるお金まつた又助が白狀は。反逆人の訴人も同然。功に免じて谷澤求馬。歸参は庄司が刀にかけんナコリヤ。心殘さず成り。慈悲の一言ハ、はつと。求馬が悦び是とても。夫婦がフシ節義がす茶道坊主の成上り。望月。篤揚。忠臣のかゞ見山國の御家老。不易の礎。と忝け涙。ホアコハ冥加なや悦ばし。白取りの地粉にしてくれうと言合や。謂我を計る謀叛の望月。生きかはりせ。御家老様へお味方と言ふもいそ死にかはり。思ひ知ら上でヤ置くべき／＼フシ勇み立ち。地庄司制してヤレかと。憤怒の面色。コハリ血走る眼。待て汝等。詞事の實否を糺すまで無事